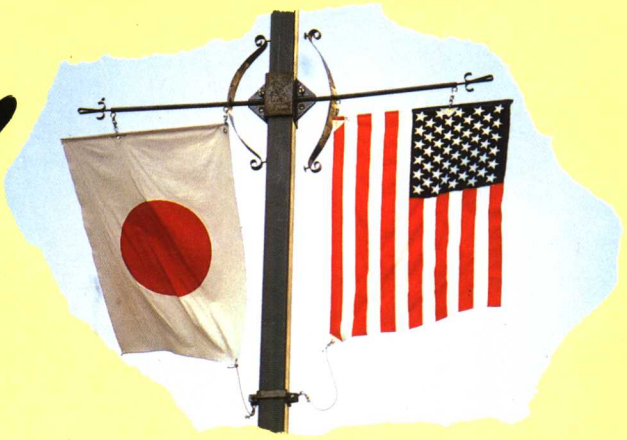


最新アメリカ

ビジネス事情

保科一明
九州産業

だが、日本人は誤解される



著者紹介

●保科一明 (ほしな かずあき)

1920年、東京生まれ。中央大学英法科卒。1952年三井物産の前身第一通商入社。1955住友商事に入社、1974年取締役。1977年常務取締役を経て、1985年退社。この間、アメリカ、アジア諸国、オーストラリア、中東など世界各国を駆け回る。1985年以来、信州大学客員講師、日本在外企業協会国際人事研究委委員長等を経て、現在ホシナ・ワールド・アソシエーツ代表、九州産業大学教授(国際経営論、貿易論等)。主な著書に『国際ビジネスマン』(潮文社)、『日米人種戦争』(廣濟堂出版)、『国際経営人事研究委員会レポート』(日本在外企業協会編)などがある。

だから、日本人は誤解される

著者 保科一明
発行者 皆川純一郎
発行所 HBJ出版局

東京都千代田区一番町22-1
一番町セントラルビル(〒102)
電話 (03) 234-3911
郵便振替 (東京) 7-58048

印刷所 中央精版印刷株式会社

©1989 <検印省略> ISBN4-8337-3016-2

定価は、カバーに明示してあります。落丁・乱丁本は、お取り替えいたします。

HBJ

BUSINESS EXPRESS

112
F7811
104

保科一明

九州産業大学教授

だがら
日本人は
誤解される

最新アメリカ

ビジネス事情

エッセイ出版局



プロローグ

日米二つの“はかり”を持って

このごろは国際的接触の全くない日本のビジネスはゼロである。日本伝統の饅頭屋さんでもあんこは台湾から輸入し、やがては中国に頼もうなどと考えている。

そこで国際人になれ、国際センスを磨けといった檄文がビジネス社会に充満する。

言葉の定義などどうでもよく、国際センスを身につけるためにはいったい何が必要となってくるのか、ということが問題になる。

外国に長く在住し、その国の人から高い評価を受けた人々が語ることに一つの共通点がある。日本の“はかり”で他国をはかつてはいけない。“はかり”を二つ持てるようにしなさい、ということだ。日本の“はかり”を捨てる必要はないが、時に応じて“はかり”を使いわける度量と才能がほしいということだ。

アメリカには百三十四の人種がいるというから、百三十四の“はかり”がいるのかと反論があるかもしれないが、そんな勘定は人類学者に任せておけばよい。

アメリカは言語や宗教を異にする多数の人種・民族グループが、一方でそれぞれの文化的遺産を

保持し、他方では社会的統合をめざしている貴重なケースの国だから、ケーススタディのつもりで自分のビジネス社会に必要な二、三の「はかり」を持ったらよいのである。

この本の目的は、もう一つの「はかり」の紹介である。当然のことだが、アメリカサイドに立って物事を見ていく。参照する新聞、雑誌などの記事も極力アメリカサイドに立ったものを採用している。当然、アメリカで大成功している日系企業でも、たいへん難しい問題に直面しているケースがたくさん出てくる。

今まで出版された多数のビジネスガイドブックは、これも当然のことだが、関係のビジネスそのものしか扱っていない。そこには生きた人間が介入していないのだ。人が介入した話は完全に随筆の世界になってしまっている。

アメリカでチャンコ鍋風のスープのことをホッチ・ポッチ (hotch-potch) というが、この本も肉と野菜が入りまざったホッチ・ポッチのスープのような味付けになっている。

私は日本人とアメリカ人ほど人種的、文化的、社会システムの遠く隔たった国民はいないと思う。多民族国家代表と単一民族国家代表、資源国と無資源国、世界最大の軍事力保有国と町人国家、個人主義と集合主義、戦争に勝った国と負けた国。その二つの国が今までなんとかうまくやってこられたのは、地勢的、軍事的、経済的に補充関係がありそのバランスがとれていたからである。

今、貿易収支も年間五百億ドルの日本の黒字、いざれ百万人のアメリカ人を雇用するといわれる日本の対米企業進出、アメリカの国債(負債)年間発行額の半分を買いとる日本の機関投資家など

バランスは大きく崩れかけている。

対米進出日系企業の今後の成否、日本人とアメリカ人との米国内でのコミュニケーションの展開などなど正念場はこれからの十年にかかっている。バラ色のシナリオが描かれるのか、大暴風雨の舞台展開になるのかは、日米の企業人、日米ビジネスマン一人一人の心と行動にかかっている。

このようにいままでの日米関係の歴史にない峠道にわれわれはいるわけだが、悲しいかなそこには的確な“道路標識”がない。

古い表現で「敵を知り己れを知れば百戦危からず」という名言がある。敵ではなく友人としてまします深い交際の中に入っていく日米ビジネスマン、その関係がうまくいくようにと念じ、日本ビジネスマンの対米理解にささやかなコントリビューション（貢献）をしたいと考えて書かれたのがこの本である。

なお、この本ではビジネスマンという言葉が使っている。アメリカ式に気を使って書けば、ビジネスビープルというところだが日本ではまだなじみがないのでビジネスマンを使った。米国では公式的な使用の場合、ポリースビープル、セールスビープルなどが一般化している。ポリースマンは差別表現とされる。

目次——だから、日本人は誤解される

ブローグ 日米二つの「はかり」を持って

第1章 大誤解される日本・日本人

——無知が日米摩擦を引きおこす

知らないではすまされないマナー 18

- 目をそらして話すのは失礼
- お酒を飲んで大声はタブー
- マナーのABCも知らないビジネスマン
- ギャングの国でもある
- アル中“先進国”
- 日本の土地常識は通じない
- キャッシュレス社会

第2章

アメリカ人と日本人は根本的に違う

——会社、仕事に対する常識を捨てよ——

- 陽気なアメリカパーティー
- 奥さんではなく「外さん」
- サンキューの精神が必要

「出る杭は打たれない」社会 42

●自己主張こそ生存の第一条件

日本・日本人は例外的民族 44

●まだまだ抜けない島国根性

仕事の「印象考課」は日本だけ 46

●契約以外の仕事はしない欧米人

転職してこそプロになれる 50

●雇用システムが根本から違う

●アメリカの部長は絶対的権力をもつ

日系金融機関がMBAに大モテ 53

●アメリカ流経営を取り入れるとき

第3章

日本人のMBA取得がブームに 56

●給料もらいながらビジネス・スクールへ
アメリカ人はよく働く!?! 58

●ふえ続けるサンデー・ショッピング

ついに訴えられた日本企業

——アメリカでは技術だけで勝負できない

日本は人種差別国家だ 62

●移民国家アメリカは差別禁止国

●アメリカは「サラダ・ボウル」

米国ホンダの成功は「教科書」 67

●アメリカ人好みの車を作る努力が実る

●連邦と州の利害は一致しない

多民族による解放運動 72

●男女雇用の差別を禁止

●海軍や陸軍にも女性兵士が進出

女性秘書に訴えられた日本商社 78

●平等意識に欠ける日本人

「アメリカが日本に買われる!!」 81

●日本の集中的企業進出の賛否

●黒人採用率が低い日系企業

第4章

ビジネスに裁判はつきもの

——大岡裁きは通用しない訴訟社会

「以心伝心」は効かないノ 88

●すべてが弁護士中心の社会

●「ピン」の弁護士

●「キリ」の弁護士

仕事の成否を決する弁護士選び 94

●弁護士の支持政党も注意

●紹介されても安心できない

●ニューヨークの弁護士によりお知らせ

欠陥製品に対する製造物責任法

●商品代以上に取りられる示談金

第5章

- 人身がからむと大問題に
- 訴訟のキャンブル性を非難する声も

連邦の「日本叩き」、州は大歓迎

—— 利害が対立する連邦と州政府

各州が熱烈な日本企業誘致合戦

110

- 自動車メーカーの土地代はすべて無料
- 州政府を過信すると落とし穴に
- 飲酒年齢めぐる連邦と州の争い

109

第6章

企業を発展させるM&A最前線

—— M & A マネーゲームが日本でも本格化

全く違うアメリカの経営感覚

118

- 十万人の日本人が住みつく
- M & A は企業革命ができるなど利点も多い
- アイアコッカはM & A に批判的
- M & A のマイナス部分とは

122

117

第7章

アメリカ産業の盛衰

——GMからRCAレコードまで

- M & A なくして国際経営はありえない
米経済紙にみる M & A ケーススタディ 127
- 事実は小説よりも奇なり
- テキサコ、カナダ会社の株七八%売却
八八年史上最高の M & A に 133
- ブラック・マンデー以後、再び息吹き返す
日本企業による米企業のテークオーバー 135
- M & A 史に残る日本主役の物語
- プリヂストンのファイアーストーン買収
- ソニーの CBS レコードの買収
- 中堅企業へとすそ野広がる

アメリカ産業の現場をみる 146

● 衰退しつつある産業と興隆する産業
シリコン・バレーはアメリカの誇り 148

- 全米各地にハイテク・センター
- 冒険的開発の企業精神
- 注目されるベンチャー企業の投資家
- ロバート・チャンバース
- 個人の才能に大金出す投資家
- 後退する米半導体産業 157
- シリコン・バレーへの疑問と論争
- フォードとGMの危機 160
- アメリカを代表する自動車会社の盛衰
- フォードVS GM
- いつGMは目覚めるのか
- GMに吹いたM&Aの嵐
- 六十四年ぶりにGM抜いたフォード
- ルノーとフォルクス・ワーゲンの撤退
- 米国はベルト（地帯）に分けられる 175
- それぞれ特長ある地域
- 中部平原地帯は世界の食糧庫 179

●カーターの輸出規制で衰退

●大手銀行まで受難期

●異常気象で穀物価格も大荒れ

●ハートランドの石油興亡 187

●アメリカの八五%が小石油会社

●デフレーションベルトは「黄金地帯」に

●米国石油エクスパートの主張

●メジャーの危機つづく

●開発すすめる日本の石油業界と米国企業

●ハートランドのケミカル会社は好況 196

●石油会社の救世主

●ブラック・マンデーと米国証券業界 199

●信頼を失ったウォール街の横顔

●ウォール街の「お祭り」が続いた時代

●「十月大暴落」の原因と理由

●ウォール街のこれから

●サービス産業にみるアメリカの底力

- 八七年、レコード会社は最高、映画も好況
これがアントレプレヌール精神だ 210
- 開拓者魂がいまも生きている

第8章

日本式経営との結婚はうまくいくか

——世界最古のアメリカ労働組合

アメリカ人は働くことをどう考えるか 214

● 労働運動の歴史とそのシステム

● 日系企業進出に大きな影響

米自動車労組と日系自動車会社 219

● UAWと米国日産の対立

● 注目される米国マツダとUAWの協約

企業進出は弁護士だけに任せるな！ 224

● 日本的ハカリが全く通用しなかったケース

エピソード

それでもアメリカは巨大である

● アメリカサイドの見方

- その(一)いぜんとして最重要国
- その(二)重心は西へ移動する
- エスニック・エネルギーが発展の原因
- その(三)アメリカの景気循環
- その(四)変わるもの、変わらぬもの

編集協力／コスモセラーズ